



우리 모두 함께해요



～私たちは、みんな一緒です～

【派遣在外教育施設：ソウル日本人学校（大韓民国）】



手代木光輝学園

つくば市立松代小学校 教諭 江幡 綾子

1. はじめに

ソウル日本人学校は、日本人会理事会において1970年10月に設置された学校設立準備委員会が発足し、1972年4月に龍山区漢南洞の貸ビルの旧校舎で世界28番目の日本人学校として開校した。その後1980年に開浦洞校舎、さらには2010年に（麻浦区DMC地区）と移転を経て現在の校舎（5階建て鉄筋コンクリート）が建設され、今年度で開校42年目の学校である。また幼稚部、小学部、中学部の3学部があり、幼児・児童・生徒併せて450人を超え、年々増加傾向にある。

2. 実践内容

韓国とは領土問題や歴史問題など今もなお様々な問題を抱えている。しかしそうした感情は確かに残っているものの、実際に暮らしてみると人々の優しさや情の深さを実感することが多々あった。

今回は世界70億人が地球上で一緒に暮らしている今、心の国際理解とは何か、を考える。両国の教育を軸に、子ども達や教職員が国際社会におけるグローバルなものを見方を養う文化体験や心の交流実践を紹介したい。

(1) 現地校との交流学習

① 伝統遊びを通して

小学部では各学年とも年2回の交流学習が行われ、日本や韓国の文化を互いに交流している。韓国には歌や遊びなど日本と共通しているものがたくさんあり、どれも興味深かった。特にお正月に行われる伝統の遊びは、形こそ違うが遊び方や原型は似ている物が多かった。

特に「コンギ」という遊びは徐々にコンギを増やしながらとっていくのだが、韓国の子どもたちは投げるのもとるのも非常に上手だった。伝統遊びと言いながら、常に身近な遊びであると感じた。

空（ハヌル）小学校とは、2002 FIFA ワールドカップ（日韓共同開催）の時に日本と韓国の子ども達と一緒に日韓の友好・親善と世界の平和を願った「Y&I」を韓国語で歌った。



写真1 ハヌル小との集合写真

「ユンノリ」 율놀이

日本の双六に似ている。さいころの変わりに「ユン」という四本の棒を投げて、投げた棒の表裏などで進む数が違う。こま回しは「ペンイチギ」と言われ、鞭のような紐がついた棒を使って回すのだが、これがなかなか上手に回すことが出来ない。

「コンギ」 곤기

コンギを5つ手に取り、場（テーブルや絨毯など）の上にやさしく投げる遊びである。最初はひとつを手にとって宙に放り、場にあるもうひとつのコンギをとって落ちてくるコンギをキャッチする。これを繰り返す。日本のお手玉のような遊びである。

「トゥホノリ」 투호놀이

昔、空中や貴族の家で行われていたという、つぼの中に矢を投げ入れる遊びである。壺までの距離はあまりないが、なかなか入らない。2組に分かれ、赤と青の矢を交互に投げ入れ多く入った組の勝ち。

「チャギ（チェギ）」 제기

穴あき「葉銭」や同じく大きな鉛などを、韓紙や布に包み15センチくらいのひらひら尾をつけ上に蹴り上げる遊びである。大きさは違うが、日本の蹴鞠に似ている。蹴る（チェギ）ものが小さいので、なかなか蹴り続けられない。

また、同じくハヌル小とは3年前からは交換宿泊体験（ホームステイ）も行っている。これは日本人の家に韓国人が泊まり、逆に韓国人の家に日本人学校の児童が泊まりに行くというもの。最初は言葉や文化の違いから来る壁などを心配していた保護者もいたが、全く心配いらなかった。言葉はあくまで自分の思いを伝えるツールの一つ。子ども達には言葉はいらず、身振り手振りなどでも十分思いは伝わった。体験後はどの子も楽しめたと話すと話すなど、大成功を収めている。

②教職員同士の交流



写真2 上岩小授業風景

現地校との交流学习は子ども同士だけではない。年2回現地校の授業を参観したり行事などに参加させていただいたりした。参観しても感じたことは、まず教室環境が非常に明るかった。どの子ども達の作品もカラフルな色遣いの作品が多かった。これはソウルの町並みと同じである。歩道を初め工事中のビルの囲いまで至る所にオブジェが飾られている。無機質なイメージの多い日本と比べると、カラフルで芸術の完成度の高い物ばかりである。

また、教科指導はもっぱら黒板とホワイトボードを併用しながら必要なことだけ板書する。一斉授業型が主流。ノートはほとんど使わない。分厚い教科書に大事なことを記したり、付箋紙に書いて付け足したりする程度である。デジタル化が進んでいて、視覚による授業展開が多い。

さらに給食も出されるのだが、ランチルームとよばれる場所で各学年一斉に食べる。必ずと言っていいほどキムチが出る。子ども向けだからと言って決して甘くない。日本人にとって、熟成され酸味がきいたキムチは一口で十分だが、慣れてくるとやみつきになるから不思議である。

こうした参観や給食を共にすることで、互いの文化を知る大きな機会に恵まれた。特に低学年からコンピュータの操作に慣れさせ、課題として韓国語と英語でレポートを書かせる、といった事もどの学校でも普通に行われていたことは驚きである。ネイティブな英語を週3時間以上ひたすら聞いて覚える。その反面伝統文化の時間も設け、前述した伝統遊びなどを体験し祖国を愛する心を忘れない韓国の教育に対する姿勢を実感した。

また大使館を通して現地の教職員を対象に、日本と韓国の教育に対する違いや感じていることなどを交流する、率直な意見交換会も毎年行った。ほとんどの方が日本へ留学経験があり、肯定的に日本を捉えていたため、有意義な話し合いとなった。話し合う中で日韓の教育の共通点や相違点が見つかり相互理解を深めることができた。こうして忌憚ない意見を交換できる場を設けていただいたことは、本当にありがたいことである。隣国同士よきパートナーとして協力していくことの大切さも感じた。正直政治的背景を元に断られた学校もあった。しかし、日韓問題がまだまだ根強く残る中、将来を担う子ども達に対し分け隔て無く愛情を注ぎ、広い心で迎え入れた各小学校、教育関係者の方々に尊敬の念を抱かずにはいられない。



写真3 ランチルーム

③地区探検

小学2年生を担当した時は、地域の商店街を中心に学区探検を行った。実は移転最初の年、地域の商店街に学区探検の実施協力へのお願いをしたが断られてしまった。それでも探検の趣旨などを何度も話し、協力してもらえるようになった。

そうしてようやく実現した地区探検。ソウル日本人学校に通う子ども達の9割が学校からバスで30分の地域に住んでいたため、また自由に日本人学校の外を出歩くことができなかつたため、地域の人とのつながりをもつ大きな体験となった。特に日本と韓国の両国籍を持つ子や在韓年数の長い子がグループの中心となって探検を行った。子ども達はお店の人に仕事の内容や売られている商品などを質問したり、その内容を書き取ったりした。

探検後は学習してきた内容を元に学校周辺の地図を作成した。どんなお店があるのか、どのくらいあるのかなど目で見てわかったり、密集した住宅地が多いソウルには必ず地区ごとに商店街があることを知ったりすることができた。

さらに住宅地周辺には定期的に市場が開かれる。食料品から日用品、衣類や遊具などあらゆる物を売りに来る「市場」へも足を運び、韓国ならではの文化に触れる学習を行うことができた。「いくらですか？(얼마예요?)」や「一つ下さい。(하나주세요)」など学習してきた韓国語を実践的に使うことで自信をつけることもできた。

これをきっかけにその後は毎年地区探検を実施している。気軽に試食ができる市場での探検は子ども達にとって楽しみの一つにもなった。



写真4・5 地区探検をしている様子

(2)ナザレ園～魂だけは祖国の日本に帰りたい～

①慶州ナザレ園について (경주 나자레원)

ナザレ園は仏国寺や石窟庵など新羅時代の歴史文化遺産で有名な古都慶州（韓国南東部）にある。1945年の終戦（韓国では解放）後に、朝鮮人と結婚した日本人女性の何人かは朝鮮に残ることを選択した。しかし、解放を迎えた朝鮮で日本人を妻にしていることが社会的重荷となって日本人妻を捨てたり、妾として迎えられた日本人妻がその処遇に耐えられなくなって家を出たり、または1950年に勃発する朝鮮戦争で夫と行き分かれるなどによって、独り身になったまま生活する日本人女性が日本に帰国できないまま取り残された。慶州ナザレ園はそうした日本人妻を援助するために設立されたものである。（ウィキペディアより引用）



写真6 派遣教員家族によるナザレ園訪問

②歌と心で結ぶ

ナザレ園では最高齢が100歳、平均年齢が91歳の24人の入居者がいる。（2013年7月時点）ここでは園長の宋美虎（ソンミホ）さんが流暢な日本語で話を進めていたが、彼女たちにとって日本語よりも韓国語の生活が長くなり、日本語は理解できるものの韓国語が話しやすくなってしまったという。そのため、礼拝でお祈りをしたり自由時間を過ごしたりする以外は、夏場でもオンドルの効いた部屋で日本の歌をたくさん歌っているそうだ。特にお気に入りなのが「幸せなら手をたたこう」である。事実この曲が発売された1964年には彼女たちは当然日本におらず、日本語での歌詞も知らなかったはずである。

しかし、明るく前向きなこの曲は彼女たちのお気に入りとなった。その上、原曲に歌詞を加えていき今では6番までのオリジナル歌詞も生まれている。

どんなに時が経ってもリズムを覚えていれば自然と歌詞も思い出すから、と歌で日本の心を忘れないよう彼女達を大切にしてくれる宋美虎（ソンミホ）さんの温かい心遣いに胸が痛んだ。

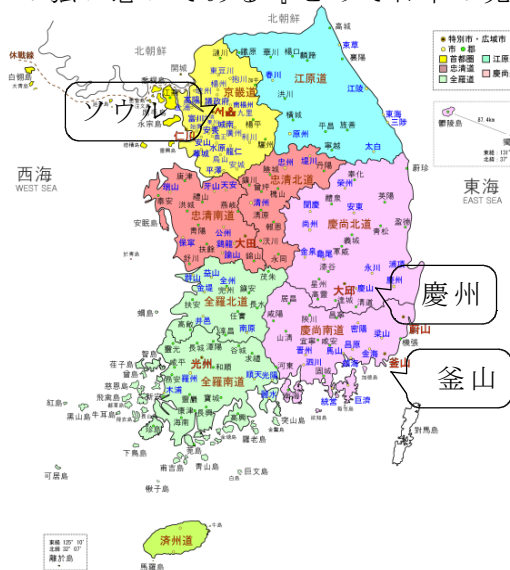
慶州は韓国の南東部に位置し、ソウルからはKTXを使って2時間程度の距離にある。こうした交流は、もともと釜山日本人学校の児童生徒達が園の存在を知っており、釜山日本人学校と交流を行った際にその存在を知ったことから始まったものである。そのため後述する中学部の修学旅行先にも組み込まれていった。最初は派遣教員有志が長期の休みを利用して訪問を行っていたが、規模も拡大し大型バスを貸し切って全員が訪れるまでになった。日本のことを忘れないように、日本の心を忘れないように、とそれぞれが出し物も行うようになった。福笑いや日本舞踊、ギターや琴演奏など趣向を凝らしたものが多い。また童謡は誰もが口ずさめ、言葉の響きやリズムは常に日本の風景や家族のことを思い出させた。

特に「ふるさと」を歌った時は、多くの方がハンカチで涙をぬぐう姿が見えた。日本に帰らないことを選択し、韓国に留まることを決めた彼女達の言葉にならない思いを感じた。また園からほど近い小高い場所には彼女達のお墓が建てられている。日本への帰国がかなわなかった彼女達の強い思いである『せめて日本の見え



写真7 福笑いを一緒に行う場面

る。海を臨むこのお墓からは、海の向こうの遠い日本まで広く見渡せる。墓の近くの石碑には「私たちは死んだら韓国の土になります。魂だけは日本に帰りたい」と刻まれている。こうした彼女達の切なる思いを叶え、温かな愛で包んでくれた創立者金龍成（キム・ヨンソン）先生の父も悲しい歴史に翻弄され、なんと日本人に命を奪われている。それでも分け隔て無く彼女達を助けてくれた無償の愛も忘れてはならない。



資料1 韓国地図

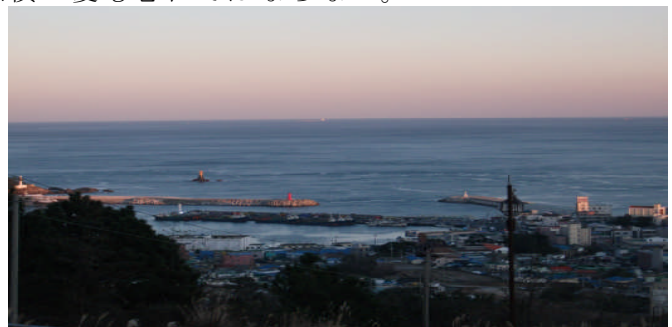


写真8 ガンホの墓から海を望む

③ 中学部との交流



写真9 一緒に歌を歌う場面

中学部では歴史学習の一環として、修学旅行先でナザレ園訪問を行っている。多感な時期に日本とのつながりを様々な場面で学習することはとても大切である。派遣教員同様、主に日本の歌を歌ったり、ソウル日本人学校オリジナルの「ソウル太鼓」を披露したりして交流を深めている。孫以上もの年齢がはなれていても、途切れなく日本人が多く訪れることに大きな喜びを感じている、と宋美虎さんは語っていた。「韓国人を愛し、最後まで愛する夫の元に残る決断をした日本人を見捨てることはできない。」と、続けて語った宋美虎さんの言葉に胸が詰まる思いだった。これまでの日韓の関係を語る上で、政治的な問題は避けて通れないことである。だからこそ、これからの未来を生きる子ども達に濁りのない目で本当に正しい道を歩む、真の心の交流となったことであろう。

(3) 交流の枠を超えて・・・

日韓の触れあいは更に様々な形で行っている。毎年5月にソウル広場で行われる「ハイソウル」では世界の国の文化を紹介し合うイベントがある。ソウル日本人学校では中学部を中心に太鼓とお囃子、オリジナルの踊りを披露している。また、12月にはソウル日本人学校を会場としたクリスマスコンサートが開かれている。韓国人によるコーラスや児童生徒達による歌や合奏はもちろん、近年では東日本大地震復興チャリティも兼ねた募金を行っている。参加者全員で「花は咲く」を合唱し、遠く離れた場所からも心がつながっていること、復興を心より願って歌を届けている。

また、ソウルの小学校にはほとんどプールがないため、夏場には日本人学校のプールを提供している。室内プールは天候に左右されず、また床が昇降できるため大変好評である。膝丈ぐらいの水深でも不安がる韓国人の子ども達に、浮く楽しさや泳げる喜びを一生懸命教えていたのが印象的だった。

さらに私の子どもが所属するサッカーチームも、近隣の小中学校やインターナショナル所属の子ども達とよく試合を行った。同じスポーツを愛する子ども達は真剣に向き合い、一緒に汗を流す。そこには純粋にスポーツを愛し、楽しんでいた。試合後は互いの健闘をたたえるなどすがすがしい姿があった。



写真10 ソウル太鼓の披露



写真11 水泳交流学习

3 成果と課題

国際理解とは何か。交通や通信網の急速な発達により世界のボーダレス化が進んでいる。私たちはつながりや違いにだけ目を向ける国際的なものの見方から、外側から全体の利益を考える「グローバルなもの見方」を養う必要がある。まだまだ歴史や政治的な問題は数多く残っている。しかし、日常のあらゆる場面で共に支え合う関係作りをしていくことが必要である。今回の派遣でそのことを強く感じる事ができた。魂が動いたとき、率先して行動を起こす大切さも学んだ。

얼굴찌푸리지말아요

(컬투)

얼굴찌푸리지말아요 모두가힘들잖아요
기쁨의날위해함께할 친구들이있잖아요
혼자라고느껴질때면 주위를둘러보세요
이렇게많은이들모두가 나의친구랍니다

資料2 韓国の(子ども向けの)歌

4 おわりに

私たち平成23年度派遣組は折しも東日本大地震に見舞われてから派遣地へ向け、後ろ髪を引かれながら日本を出発した。そして真夜中の任国到着。寂しさと不安に押しつぶされそうだった。それでも頑張れたのは家族や共に励まし合った同期、優しい笑顔で包んでくれたサンガのアジュンマ、何かと助けてくれた韓国人スタッフ、チング達の温かい支えがあったからこそ。素晴らしい経験ができたこと、それらすべてに感謝し、そして今後も続いていくことを願ってやまない。